

飯田昭二〈幻触〉と現代美術の転換点(1960年代末)

…石子順造と李禹煥の存在

本阿弥 清(ほんなみ きよし/NPO 法人環境芸術ネットワーク代表, 美術評論家連盟会員)

飯田昭二は、2019年10月22日、静岡市内の病院で、急性心不全のため91歳で亡くなった。昭和2年生まれの飯田は、〈グループ幻触〉の主要メンバー5人(飯田昭二、丹羽勝次、前田守一、鈴木慶則、小池一誠)の中では最年長だった。



幻触メンバー5人「幻触展」2005年 鎌倉画廊
左から小池一誠、前田守一、鈴木慶則、飯田昭二、丹羽勝次 撮影者:本阿弥清



石子順造「寺山修司と雑誌で対談中
1975年8月頃」写真提供:木村円

そして、生前の飯田が「無宗派、散骨希望、告別式は行わない」の遺言を残したことから、家族葬が終わった後に、娘の今日子さんから逝去の知らせを受けた。

数年前の飯田との会話のなかで、「僕は散骨がいいな」とっていたことを思い出しながら、信念を曲げることがなかった飯田らしい人生の仕舞い方だと、私は清々しい気持ちになっていた。

飯田のことは、他の〈幻触〉メンバーと同様に、美術界では近年までほとんど語られることがなかった。長い間、〈幻触〉の存在が美術界で語られなくなったことについては、いくつかの不運がかさなったことにあった。

一つ目は、〈幻触〉の活動を援護射撃していた美術評論家の石子順造が、1977年に40代の若さで亡くなったこと。

二つ目は、〈幻触〉メンバーの多くが、「トリックス・アンド・ヴィジョン」(東京画廊・村松画廊1968年)に参加(6名)していたことで、トリック系作家という印象が強く、〈もの派〉誕生のきっかけとなる踏台となった「過去の作家」と、近年までみなされていたこと。

そして、三つ目は、集団としての〈幻触〉の活動が、5年間(1966~71年)と短く、個に戻った作家たちの多くが静岡を拠点に活動していたことで、中央の美術界からは忘れられた存在となっていたことだった。

私自身、NPO法人で運営する美術館で、2001年に〈幻触〉を採りあげるまでは、飯田が暮らす隣町の清水に住んでいたにもかかわらず、その存在を意識することもなかった。

私と古くから親交があった〈幻触〉の鈴木慶則は、「もの派-再考」(国立国際美術館2005年)の図録エッセイの中で、「『現代美術歴史固定観念主義者』本阿弥清館長をはじめ、第一各作家の反応は鈍くあたかも他人事の如くシレーとしている」と、私や出品していた他の〈もの派〉たちのことを揶揄する文章を書いており、美術史に登場していない過去の作家を認めようとしなかった私の勉強不足と洞察力のなさを露呈する結果となってしまった。(注1)

私が、本格的に〈幻触〉について調べるようになったのは、今から20年ほど前のことだった。

これまで、最も大きな収穫となったのは、現代美術の表現方法が「絵画」「彫刻」から「平面」「立体」へと大きく変貌をとげるターニングポイントとなった1968~69年に、〈もの派〉誕生に少なからず影響を与えた可能性が高い美術家として、飯田昭二の存在に気づかされたことだった。

ここで、飯田昭二という人物について、簡単にふれておこうと思う。

飯田は、静岡市に生まれ、一時期を除いて同地を離れることはなかった。

唯一、静岡から出たのは、戦前、教職についていた父親の赴任先となった「満州」へ 1940 年に渡ったことで、戦時中は、奉天省順育成工業学校で学び勤労働員などを経て、終戦により、1946 年には帰国を余儀なくされたことだった。

静岡に戻った飯田は、身近にいた美術好き仲間らと交流が生まれ美術活動に没頭していった。

二十代だった飯田は、自由美術家協会の「自由美術展」出品と入選を通じて麻生三郎とも交流があったとされる。また、読売アンデパンダン展には、第 6～8 回(1954～56 年)まで連続 3 回参加したと思われる。

その後、飯田は、丹羽勝次らと 1965 年に静岡でグループ〈触〉を結成し、石子順造らが清水で 1958 年に立ち上げた〈グループ白〉の鈴木慶則、前田守一や、鈴木慶則と交流があった小池一誠らと合流。1966 年 5 月には、〈幻触〉が誕生している。

石子順造は、東京都出身で東京大学経済学部を卒業後の 1956 年、病気(結核)の転地療養を兼ねて、気候温暖で風光明媚な港町清水(旧清水市)の総合物流商社「鈴与」に勤務している。

そして、大学時代から現代美術やその周辺領域に深い関心を寄せていた石子は、清水・静岡にいた若い美術家たちに接近して、いきなり彼らのアトリエなどの美術現場に入ってきて付き合いが始まったことなどを、〈幻触〉メンバーが後に語っている。

まず、石子の洗礼を受けたのが、清水在住の鈴木慶則と前田守一だった。そして、隣町の静岡にいた飯田昭二や丹羽勝次らとも交流が生まれ、石子と〈幻触〉メンバーによる、美術論や作品制作についての言葉による激しいやりとりが始まったとされている。

飯田昭二「〈幻触〉がもっとも苦しかった時期というのは、「トリックス&ビジョン」展も終わり、そこで取られた方法意識に対する、自己批判のために費やされた日々であった。批判の対象はいうまでもなく、近代を「見る」にだけ限定し、「在る」と「見る」との間にある、「不分明」なるものに思い至らなかった不明さについてであり、又コンテンポラリーな画廊空間というのが、その不明さを徹底して暴き出してしまう、その厳しさについての自省であった。そんなことで僕たちの作品群に共通する、一見モダンでトリッキーな仕掛けは、近代を裸にするどころか、逆に近代によって僕たちの不明さが吊るしものになったお粗末な結果になったのだった」(注 2)



飯田昭二《Half&Half(ピンポン玉)》
トリックス&ビジョン展 1968 年
収蔵:M+コレクション(香港)



鈴木慶則《非在のタブロー(梱包されたオダリスク)》第 8 回現代日本美術展
1968 年 収蔵:静岡県立美術館

石子順造「やっぱり、鈴木(慶則)君の可能性は大きいね。鈴木君が長岡(第 5 回長岡現代美術館賞展)で失敗したのは、事物にのめり込み過ぎたからだね。あれを見た中原(佑介)が「どうして、鈴木君は、タブローの決定版を描かなかったのかな」と言ってね。小池(一誠)君なんかも戻ってきたでしょ。あなたは存在論者ですからね。ハイデッガーを全部知っている人だからね。あなたはまた戻れるんじゃないですか。丹羽(勝次)さんたちは苦しいね。絵画の制度、観念の方へ観念の事物化の方にのめり込んで

いるから。事物の観念化でも観念の事物化でもだめ。そうじゃなしに、「観念の何とか化」というのは、いかん訳よ。事物は事物だから」(注3)

鈴木慶則「石子さんには、真剣でないと怒られましたね。自分のことに関して、怠けるとすごく叱られました。相手をなじるんですよ。大勢の前でなじりました。そういう人をね。自分は傷だらけでがんばっているのに、君たち若いものはなんだ。」(注4)

鈴木健司「論客でありいつも口角泡を飛ばす勢いで熱弁していた石子さんと対等に話ができしたのは、飯田さんだけだった。すごい戦いだった。〈幻触〉の前田さん、丹羽さん、鈴木慶則さん、小池さんは、石子さんに何も言い返すことができなかった。反論できたのは飯田さんだけだった」(注5)

石子順造の性格や美術に対する想いは、当時、石子と交流があった赤瀬川原平、つげ義春、池田龍雄、中村宏、中原佑介、李禹煥、峯村敏明らの言葉からも伝わってくる。

赤瀬川原平「石子さんは、現在取り組んで書いている問題を人に話さなくては行かないのである。いやむしろ話さなければ書けないのである。人の話の中でピンポン球のように跳ねている頭の中で、論理の糸の先をつまみ上げては確認していく。その話は論理の糸をほじり出していくリズムが面白いという感じでもあった。だからしゃべる方も聞く方もえんえんと長話、長電話になってしまう」(注6)

つげ義春「一度、正月(1969年1月)に静岡の石子さんの家に行ったことがあるの。『芸術生活』の丸山さんや美術の李(禹煥)さんや鈴木慶則さんと一緒になったけど、ぼくはみんなの話を聞いていただけだからね。コタツに入って話を聞きながら落書きをしていたら、それをあとで石子さんが“作家メモ”というかたちであつかっていた」(注7)

池田龍雄「僕自身も、彼(石子)が李禹煥に会ったことや、話したことなどを聞かされた覚えがあります。とても頭のいい男で、美術家としては珍しい人だとか…。彼が東京にアパートを借りて静岡との往復生活を始めたのは1965年頃で、李禹煥と出会ったのは多分67~68年ころだと思います。李禹煥と意気投合したのは、気性、性格に共通するものがあつたのではないか。彼は非常に真面目人間で、何にでも真っ正面からひた向きに向かっている。決して斜に構えない。文章も、いつも大上段に振りかぶっている」(注8)

峯村敏明「非常にまじめで誠実な方だったので、ちやかすとか、ちょっと斜に構えて、動向をやり過ぎすとか、そういうことができなかつたんだろうと思うんですね。それが石子さんのよく考える人の魅力でもある」(注9)

中村 宏「石子さんを知ったのは『中村宏論』(『現代美術』第6号1965年)を書いてくださった時だと思います。石子さんはほとんど押しかけ女房的に私のところに来まして、あれよあれよという間に、部屋に入ってきまして、いきなり大演説をはじめたわけです。本人がいる前で「お前はこうなんだ」と。なにをぬかすかと最初は思いましたね」(注10)

中原佑介「あんなにも厳密に考えることはないと思うんだけど、『マンガ芸術論』を執筆中に、二日に1回ほど電話がかかってくるんですね、「マンガはなぜアートなのか」と。そんなことを僕に聞いたって君がどう思うか書けばいいと言うと、また二日ぐらいして「マンガとアートの関係が分からない」と、僕の本じゃないので適当に書いておけばいいんじゃないのと答えておいた」(注11)

李 禹煥「東京では、関根(伸夫)さんやいろいろな人たちと一緒にお茶を飲んだりすることがあるんですけども、(石子さんが)一生懸命に質問はするんですが、質問されるとあんまり答えません。美術専門や美術馬鹿、あんまり美術ばかりやることについては、どこかに拒否反応があつて、何か自分をうまくそちの一点に持っていくことができなかつた人だと思うんですね」(注12)

飯田昭二「夕方になって産女(静岡市産女)の石子さんの自宅に帰ると、突然に難しい話になっていくんです。鈴木慶則が待っていたり、小池一誠君が来ていたりした。すると、もういけません。ついていけないというか、彼らもついていけなかつたんだよね。だって、

話をするのが終始石子さんだからね、最初から最後まで。途中で石子さんが「今言ったこと、君はどう思う」と言うのなら話はできるんだろうけど、それすらないわけです。ですから、みんな「はあ、はあ」と聞いているだけでした。一年ぐらいでしたよ。いくら分かるようになってきたのは。その時に僕も何とかしなければと思った。当時、石子さんの前で鈴木慶則や小池一誠君が困り果てている姿を見て、とてもうらやましく思ったんだよ。俺もそうなりたい。「これは勉強しなければ」と思った。勉強しようというのはかねてから思っていたんだけど、勉強する方法がそこで決まった。それが、たまさか哲学の本であったりしたもんだから、話し言葉がテクニカルタームになったわけですよ」(注13)

日本の現代美術が、大きな変化を遂げる黎明期となった1960年代末に、すばやく作品の表現方法を変えることができたのは、<幻触>や後に<もの派>と命名されることになる作家らであり、その多くが絵画出身者であったことは注目し得る。

現在、<もの派>に位置づけられている作家のなかでは、小清水漸と狗巻賢二を除いてほとんどがそうであったように、<幻触>メンバーのすべてが絵画出身者だった。

「彫刻」の場合は、一般的に石、鉄、木、粘土などの素材を加工する高度な技術と作業が必要であり、習得するまでにはそれなりの時間が必要になる。簡単には、作品の表現方法を一朝一夕に変えることが困難だといえる。

グループ<幻触>では、「絵画」から転向できなかつたのが鈴木慶則だった。鈴木は、当時から絵画表現に人生を懸けていたところがあり、当時、他の彫刻出身者の苦悩と同じ想いを味わっていたに違いない。

そして、1968~69年ころには、飯田のサジェスチョンが、彼の周辺に集まっていた<幻触>や後の<もの派>作家たちの作品づくりにも少なからず影響を与えていった。

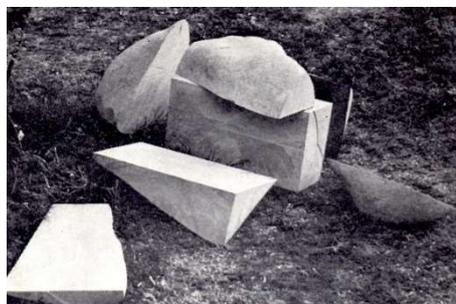
そのことは、これまでに私が行なってきた<幻触>メンバーへの聞き取り調査などからも、少しずつ分かってきたことである。

特に、<幻触>メンバーの丹羽勝次、長嶋泰典、鈴木慶則、鈴木健司らの発言は、自分の作品の評価を下げることにかなりかたくなく、勇気をもって正直に私に語ってくれたことを、今は非常に感謝している。

<飯田昭二からのサジェスチョンがあったと推測される作家・作品について以下に記す>

【第9回現代日本美術展(1969年4月)】<幻触>出品作家・作品について

■前田守一《Rheology》、小池一誠《石》、長嶋泰典《炭-茶の木※落選作品》についての発言



小池一誠《石》第9回現代日本美術展
1969年 出典:「美術手帖 1970年2月号」
李禹煥「出会いを求めて」



前田守一《RHEOLOGY》
第9回現代日本美術展 1969年
出典:「芸術生活 1969年7月号」

鈴木健司「1969年の毎日展(現代日本美術展)に出品した<幻触>メンバー(前田守一、小池一誠、長嶋泰典)は、鈴木慶則さんを除いて飯田さんのサジェスチョンで作品を制作したことは本当のことだ」(注14)

長嶋泰典「炭の作品は、飯田さんの指導で作った。飯田さんからは「自然との共同作業のような作品はできないか。人間がコントロールできない部分、自然物の変化する性質、生成、変化、消滅、再生という過程などを作品化しては」とのヒントをもらった。そして、木を燃やすと炭のようになって、灰になって無くなるという話の中で、「炭はできるのか？」との助言に、「できないことはない」と答えた。茶の木でできないかと考えて、祖父に相談し1本いただくことになった」(注15)

飯田昭二「石は安倍川ではなくて、富士川の中流域で採取したものだろう。小池(一誠)君が「自然の石を割ろうと思う」といったが、私は切った方がいいと言った。割る行為は自然界にあるもので、アートの外的ではないという理由からだ」(注16)

鈴木慶則「『幻触』にそれほどの価値が、冷静に客観的に考えてあったかどうかということだね。価値があるんです。部分的で、まだらだけど。そのまだらの濃い部分が、飯田昭二さんの《トランスマイグレーション》。そして、小池一誠さんのカットした石。前田守一さんの氷。この3点。「幻触」を支えたのは、やっぱり飯田さん、小池君、前田さんじゃないかな。この3人が三種の神器だよ、「幻触」の。この3人が支えた。僕の存在は、絵画の問題としてであって、それ以上でも以下でもないよ」

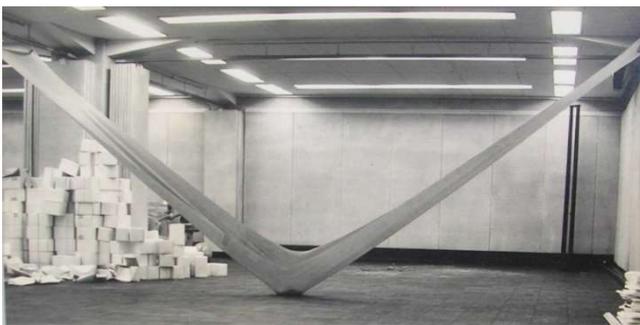
「本人たち(幻触メンバー)が堂々と「俺にはこんな作品がある」と言えればいいのに、しないんです。それを本阿弥さんが相当カバーしているんです。作家の主体性として彼らは弱いところがあるんだ。これは致命傷。それが後に、石子さんと松本(俊夫)さんの話じゃないですが、作家は復讐を受けますよ、作家自身に。惜しいんです。

例えば、小池さんの石をカットした作品の中原佑介さん評価は正しいです。石を「削る」というのは彫刻なんだ。(でも)「カット」というのは世界観ですよ。スパッと日本刀で切るようにね。これはものすごいことです。彼(小池)とは友人だった。随分、彼から哲学を教わりました。メルロ＝ポンティやフッサールなどを。彼の本棚にドーンとある」(注17)

【今日の美術・静岡展(1969年9月)】<幻触>出品作家・作品について

※審査員は針生一郎と石子順造

■鈴木健司《BASE》、丹羽勝次《ゴム》、長嶋泰典《炭》についての発言



丹羽勝次《ゴム》今日の美術・静岡展
1969年 写真提供:丹羽勝次



鈴木健司《BASE》今日の美術・静岡展
1969年 写真提供:鈴木健司

鈴木健司「《BASE》の作品は、飯田さんから助言を受けて作成した。長嶋さんも丹羽さんも同じだと思う。しかし、飯田さんからはヒントはもらったが、最終的にはみなさんが個人で考えて作品化したことはまちがいない」(注18)

丹羽勝次「『今日の美術・静岡展』のテーマは、「自然・存在・発見」だった。石を使った作品(ゴムが時間とともに延びる表現)は、飯田さんとの対話の中から生まれたものだ。

作品づくりでは、トリックス表現ではない形で自然をどう取り入れるかということになり、藁科川(安倍川の支流)の自然石を使うことになった」(注 19)

【1969 年に発表されたくもの派】作家・作品について

■飯田昭二の成田克彦についての発言

※成田克彦《SUMI》について

「成田(克彦)君にも言っていますよ。具体的に炭について言った覚えもあるね。長嶋(泰典)君にも。長嶋君と成田君がいっしょにいた時ではなくて、別々な時に話をしています」(注 20)



長嶋泰典《炭》今日の美術・静岡展
1969年 撮影者:不明



成田克彦《SUMI》1969年
出典:「美術手帖 1970年2月号」

〈幻触〉の作家たちが、1960年代後半に現代美術系雑誌に比較的多く採りあげられるようになったのは、当時、評論家として独り立ちするために「鈴与」を退職して、仕事場の拠点を東京に移していた石子順造の存在が大きかった。

また、21世紀に入ってから、消える寸前だった〈幻触〉の再評価の道を開いてくれたのが、「もの派-再考」(国立国際美術館 2005年10月)の企画担当学芸員に〈幻触〉の存在を伝え、強く推薦してくれた李禹煥の存在があった。

今日、石子順造と李禹煥がいなければ、〈幻触〉が20世紀後半の日本現代美術史に登場することも、話題になることもなかったといえる。

特に〈幻触〉の再評価の道が開かれる序章となったのは、2000年に入ってからのことだ。

〈幻触〉の人と作品が世に知られるようになったのは、立花義彰(元静岡県立美術館学芸員)の助言から始まった虹の美術館(清水)での石子順造関連の展覧会「石子順造とその仲間たち」(2001年)と、美術館で行われたトークショーをまとめた対談集『石子順造とその仲間たち』(虹の美術館 2002年)の発行がきっかけだった。

対談には、〈幻触〉主要メンバー5人のほかに、針生一郎、中原佑介、李禹煥らも駆けつけてくれた。この3人の参加は、当時、静岡県立美術館学芸員だった李美那の口添えがなければ実現しなかったことだった。

そして、美術批評誌の『あいだ』(85号 2003年)に、対談集の書評「清水に種を蒔いた評論家の回想」(高島平吾)が掲載されたことで、その書評が榎木野衣の目に留まり、早速、榎木から虹の美術館ホームページにメールが届いて私に対談集を送ったことが、幸運の始まりだった。

その後、榎木は、「美術手帖」に特別掲載していた『戦争と万博』(2003年)に、石子と〈幻触〉を採りあげ単行本(美術出版社 2005年)にもなったことで、榎木から影響を受けていた若い美術研究者らに、石子や〈幻触〉の存在が広く知られるようになった。

さらに、榎木は、加治屋健司に〈幻触〉の存在を紹介したことで、「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」のインタビューに、〈幻触〉メンバー3人が参加できたことも大きかった。

〈幻触〉の活動拠点になっていた静岡県では、静岡県立美術館学芸員の堀切正人(現・常葉大学准教授)や川谷承子らによって、その後〈幻触〉の検証作業が進められてきた。

同じころ、鎌倉画廊では、「幻触展」(2005年6月)が、国立国際美術館では、企画展「もの派-再考」(2005年10月)に〈幻触〉が取りあげられた。

実は、この2つの展覧会に〈幻触〉を推薦してくれたのが李禹煥だったことを、後に李禹煥本人からも直接聞くことができた。

李禹煥は、〈幻触〉の理論的支柱となっていた飯田の作品《トランスマイグレーション》(第9回現代日本美術展)を、特に高く評価していた。

李禹煥「飯田昭二さんの木を切った《トランスマイグレーション》はいい。半分は山に植えて半分は美術館に置くという作品で、山と美術館の間の開かれた空間や幅自身が作品といえるんです。そういう作品は、従来はあんまりなかった。人間がタッチしない外の外部性に重点を置く仕事に入っていくことが、後に起こってくるんですね。作ることと作らないことの両方が絡んでくるんですね。近代美術史の中で一番大事なことは、自分の内側だけでなく外の世界を容認することが重要なんですね。外の物を空間を容認することは、飯田さんの作品は、山に立っている木の半分と美術館にある木の半分は、その間、その間を越えて宇宙までもが作品といえるんですね」(注21)

李禹煥「美術手帖」1970年2月号」に掲載された私の論文『出会いを求めて』では、飯田昭二さんの木を切った《トランスマイグレーション》と小池一誠さんの《石》の作品を、図版として使用したのも美術手帖に紹介したのも私だ。〈幻触〉には、飯田さん以外にも前田守一さんや小池一誠さんなどの優れた作家がいた」(注22)



飯田昭二《トランスマイグレーション》
第9回現代日本美術展 1969年
出典:「芸術生活 1969年7月号」

私が、生前の飯田昭二に対して「李禹煥さんがいなければ、今日、〈幻触〉の再評価にはつながらなかったんですよ」と、何度となく話をした会話は、今は懐かしい思い出となってしまった。

最後に、〈幻触〉が、1971年にグループとしての活動を終え、飯田昭二や小池一誠が個の作家に戻った以降のことについて少し触れておきたい。

石子が急逝した1970年代後半以降の小池一誠が丸石に点描を打つ立体作品と、飯田の淡い色調の平面作品(和紙に水彩画や墨)は、当時、〈幻触〉メンバーと交流があった郭仁植の1970~80年代作品からの影響があったのではないかと、昨年、韓国で開催され郭仁植展「QUAC

INSIK」(大邱美術館 2019 年)の図録(上田雄三(ギャラリスト)から提供されたもの)や、白井嘉尚(美術家)から借用した郭仁植の 1970~80 年代個展カタログなどを見ながら今は思っている。



小池一誠《石》※点描の丸石
1970 年後半~80 年前半の作品
撮影者:本阿弥清



飯田昭二「ドットと紙の出会い」1998 年
写真提供:鎌倉画廊

なお、飯田を慕う美術関係者らが、今年(2020 年)、国内 2 ヶ所と台湾(台北市)で回顧展を開催することになった。

- 『飯田昭二 1927-2019』(鎌倉画廊・鎌倉市) 3/10(火)~5/16(土) 代表:中村文則
- 『飯田昭二展』(ヒロヒロアールスペース・台湾台北市) 6/6(土)~7/31(金) 代表:陳品好
- 『飯田昭二(偲ぶ会)展』(アートカゲヤマ画廊・静岡県藤枝市) 9/7(月)~13(日) 代表:丹羽勝次、副代表:白井嘉尚

★この原稿は、美術批評誌『あいだ』に掲載予定(現在、掲載内容を調整中)である。(筆者)
2020 年 3 月

注釈:

- (注 1) 『もの派-再考』(国立国際美術館 2005 年)図録 P45
- (注 2) 『耕作だより(天地耕作)NO.8 1990 年』飯田昭二が寄稿した「<幻触>後記」より
- (注 3) 石子順造『石子順造美術講座』1968 年 12 月 8 日静岡市(※録音テープは飯田宅で発見され、1987 年ころに夏池篤によってデジタル音声変換)
- (注 4) 鈴木慶則×李美那対談『石子順造の思い出』2002 年虹の美術館 P34
- (注 5) 鈴木健司(幻触メンバー)からの聞き取り 2019 年 12 月 9 日
- (注 6) 赤瀬川原平『夜行』7号(北冬書房:1978 年 6 月)石子順造追悼文 P65
- (注 7) つげ義春『夜行』7号(北冬書房:1978 年 6 月)石子順造追悼文 P96
- (注 8) 『池田龍雄×鈴木慶則×中村宏×本阿弥清×峯村敏明対談集』(虹の美術館:2004 年 2 月)P23
- (注 9) 『池田龍雄×鈴木慶則×中村宏×本阿弥清×峯村敏明対談集』(虹の美術館:2004 年 2 月)P15
- (注 10) 『池田龍雄×鈴木慶則×中村宏×本阿弥清×峯村敏明対談集』(虹の美術館:2004 年 2 月)P11
- (注 11) 『石子順造とその仲間たち 対談集』(虹の美術館:2002 年 11 月)P70
- (注 12) 『石子順造とその仲間たち 対談集』(虹の美術館:2002 年 11 月)P75
- (注 13) 飯田昭二『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ』2010 年 9 月 18 日
- (注 14) 鈴木健司(幻触メンバー)からの聞き取り 2019 年 12 月 9 日
- (注 15) 長嶋泰典(幻触メンバー)からの書面による回答 2013 年 5 月
- (注 16) 飯田昭二からの聞き取り 2015 年 3 月 6 日
- (注 17) 鈴木慶則『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ』2010 年 9 月 19 日
- (注 18) 鈴木健司(幻触メンバー)からの聞き取り 2019 年 12 月 9 日
- (注 19) 丹羽勝次からの聞き取り 2019 年 12 月 13 日
- (注 20) 飯田昭二『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ』2010 年 9 月 18 日
- (注 21) 李禹煥へのインタビュー 2005 年 8 月 11 日
- (注 22) 李禹煥からの聞き取り 2020 年 1 月 12 日 学士会館にて